

[演題 4]

着物着付け指導者における紐類の締め付け強さについて

～ 車椅子着付け圧力の検証 ～

松村 裕奈¹⁾, 大園 彩寧¹⁾, 古田 恒輔²⁾

1) 神戸学院大学 総合リハビリテーション学部 作業療法学科 4年生

2) 神戸学院大学 総合リハビリテーション学部 作業療法学科

1. はじめに

車椅子利用者に対する着物の着付けは、ベッド上での臥位での着付けや、車椅子に広げた着物をまとわせる方法がとられてきた。

今回は一般的な振袖を用いて、車椅子着付け時のゴムベルトなどによる締め付け手法と着付け手順の変更によって、障害者への車椅子着付けにおける圧迫を軽減できると考えた。しかし、実際にどの程度体幹の圧迫が減少しているかは明らかではなかった。これが確認できれば、障害者へ着付ける際の「締め付け方」を具体的に示すことができると考えられた。今回の研究では、ベルトによる締め付けの特徴が確認でき、新たな着付け手順を考える一助となったため報告する。

2. 対象と方法

対象は、京都きもの学院京都本校の専任講師 7 名である。講師の着付け指導年数は平均 14 年、最短 5 年、最長 30 年であった。年齢は平均 55 歳±8 で 7 名全員女性である。

(1) 圧力測定手順

- ① 長襦袢を着せ、ウエストベルト (WB) で長襦袢を留める。
- ② コーリンベルトを左右引き出して、長襦袢の前身頃を整えてクリップする。
- ③ 背部にある伊達締めを引き出し、コーリンベルトの上から巻く。伊達締めは前方で止める。
- ④ 前身頃の長さを調整し、背部にあるウエストベルトを引き出し留める。
- ⑤ 着物の前身頃を整え、コーリンベルトを引き出し衿に止める。
- ⑥ 背部にある伊達締めを引き出し前方 (腹部) で留める。
- ⑦ 体を前方に傾け、背部に隙間を作り、帯を左脇から回し入れ背部へ一巻きし、差し込んで締め、平クリップで固定する。
- ⑧ 帯の上から帯締を締める。
- ⑨ 三重紐を前方で帯の上で締める。締め込んだ後、帯の内側に隠す。
- ⑩ 帯揚げを引き出して、青海波の形を作り、帯裏に隠す。
- ⑪ 帯を留めていたクリップ、長襦袢と着物袖の固定クリップを外す。

(2) 倫理審査

この研究は、神戸学院大学総合リハビリテーション学部人の倫理審査委員会にて許可されている。(総倫 22-15) また、京都きもの学院京都本校倫理審査委員会においても許可された。(京き学 2022001)

3. 結果

ベルトごとに圧力を計測した結果、帯状の圧力発生が観察できた。発生した部分を均等に4分割し、右から「A」「B」「C」「D」ゾーンとした。被験者ごとに各ゾーンに発生する圧を「長襦袢ウエストベルト」と「着物ウエストベルト」、「着つけ最終」の3つとし圧力変化をみた。

圧力計測の結果、腹部周りでウエストベルトによる圧力は着物を着せるとさらに増加した。また7名全員で、計6点の四角い形状の圧力発生が共通して見られ、さらにウエストベルトより上方に三角形の圧力発生が見られた。

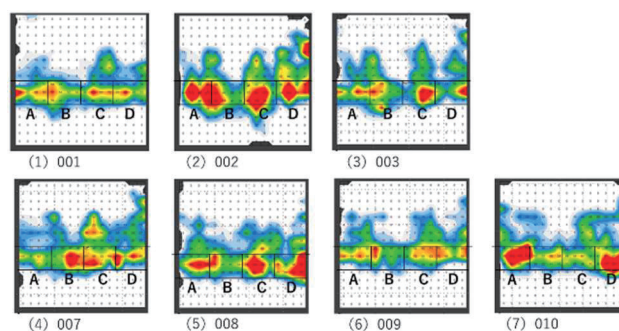


図-1 被検者ごとの着付け最終圧

4. 考察

今回の車椅子着付けでは、一般着付けの手順を大幅に変更する方法を用いた。また、一般的な車椅子シーティング調整に加え、殿部に大きなゆとりを持たせ、骨盤を立てた座位を確保し、殿部の前方への滑りを抑制するために、ポジショニングクッションを用いて姿勢の崩れと殿部圧力の分散に配慮した。

(1) ベルトごとの圧力変化について

圧力が発生した点を見るとウエストベルトの金具部分や、折り返し部分の縫い目にあたっており、ウエストベルト接続金具部分の段差ではないかと考えられた。圧力を確認したところ、各被験者に同様の圧が発生していたことから6点の圧力は、ウエストベルトによる圧発生であると考えられた。

着付けが進む程に圧力増大するため、体幹の感覚が脱出する脊髄損傷者などでは、この圧力のコントロールが重要な課題といえた。

(2) ウエストベルト金具圧への対策

ウエストベルトは長襦袢の段階で発生しており、全員に見られたこと、圧力が強くなることから、長さ調整金具と引っ掛け金具、金具固定の縫い返しが圧発生源と考えられた。わずかな突起部分も次第に大きな圧になることから、ウエストベルトは金具部分を反転させて体の外側に突起を持って行くことが考えられた。さらに圧を取り除くには、ウエストベルトは伊達締め装着後に取り除いてしまう方法が考えられた。(図-2)

ゴムベルトを用いた着付けは、紐に比べて呼吸や体幹の動きに追従しながら必要最低限の圧力発生(着物の保持)を行える利点があるが、長さ調節を間違えると大きな圧発生を招きかねない。また、圧の発生がベルトの調節機構の構造に起因していた。体幹の締め付けに配慮を必要とする事例では、ベルトの利用も慎重にすべきであると考えられた。疾患や症状、生活活動の内容と着物を着たまの経過時間が長ければ、ベルトを用いなくて済ませる方法も必要であると考えられた。



図-2 ウエストベルト接続金具部分

(上段：反転使用 下段：通常使用)

(3) おはしよりの折り目

全員において A と B の境目、CD の境目の上方に低い圧力発生が見られた。圧発生部位周辺を見ると、おはしよりの三角の折り返しが幾重にも生じていた。車椅子着付けでは、座位で着付けることから着物の前身頃が重なりやすく、この点はおはしよりを折り返した後、腹部で広げて返すこと、長襦袢と着物のおはしより位置を上下にずらして重ねないなどの工夫で圧力は軽減できると考えられた。

5. 今後について

今回ご協力いただいた京都きもの学院の着付け師に圧力分布を見せたところ、締め付けのイメージが想像とは異なっていたことが挙げられ、障害のある場合の配慮を理解する機会となった。今後は、実際に車椅子着付けの手法を普及させるためのカリキュラム提案を行いたい。

引用文献

- (1) 水島恭愛,武田富江編：きもの教本〔技術編（初級・中級）〕.財団法人 民族衣裳文化普及協会：2010.
- (2) 水島恭愛,武田富江編：きもの教本〔技術・基礎編〕. 財団法人 民族衣裳文化普及協会：2008.